

## 2.26 事件から 75 年

昨日 2 月 26 日は、2・26 事件が起きてから 75 周年に当たった。この事件は、私が生まれる前年の昭和 11 年つまり 1936 年に起きた。昨日の朝日新聞夕刊に、事件の後で処刑された青年将校らの遺書や遺墨が発見され、それらが賢崇寺に収められたことが簡単に書かれていた。この新聞記事には、単に賢崇寺(東京都)と書かれているだけだったが、この寺は私が住んでいるところの近くにあり、2・26 事件で処刑された青年将校らの墓がある。

麻布一帯は坂の多いところだ。私が住んでいるメゾン麻布というマンションは、飯倉片町から一の橋に南向きに下る勾配の緩い坂に沿っている。この坂は永坂といい、町名変更が行われる前には、このあたりは麻布永坂町だった。この由緒ある名前がなくなって、今では六本木 5 丁目になっている。一の橋から右に、つまり西に向かう通りが麻布十番通りだ。

この通りを六本木ヒルズに向かって西に少し進んでから、南に入ると、また登り坂になる。賢崇寺(けんそうじ)は、その坂を南向きに上がったところにある曹洞宗の禅寺で、佐賀藩鍋島家の菩提寺だ。外からはわからないが、寺域は意外に広く、墓域も相当なものだ。そのなかに青年将校の墓があることを私が知ったのは、30 年ほど前のことだ。

昨日の新聞記事が出たので、今朝もう一度ここに行ってみた。ところが、記憶とは

異なっていて、青年将校の墓を見付けることはできなかった。あとで帰宅してから、この寺のウェブサイトを見たところ、「二十士之霊」と刻んだ自然石のような墓石があることになっている。寺では、今でも墓域の整理をしているので、30 年ほどの間に青年将校の墓も今の形に変わったのかもしれない。

賢崇寺がこの墓を建てた理由は、22 人の処刑された青年将校(自決した 2 人を含む)の中に佐賀県関係者が 4 人いたことの他に、この寺が事件を起こした麻布連隊の場所に近いからだろう。麻布連隊は六本木交差点から北に少し行ったところにあった。それらがあったところは、今では六本木ミッドタウンと国立新美術館になっている。今朝、ここにも行ってみた。

麻布連隊(昔は麻布聯隊と書いた)というのは、歩兵第 1 聯隊と第 3 聯隊から成っており、どちらも元来は第 1 師団に属していたもので、明治の初期から麻布に置かれていたようだ。麻布 1 聯隊、3 聯隊と略称されていたらしい。六本木ミッドタウンのビル群が建つ前、六本木交差点からさほど離れていないこの場所に、六本木界隈の雰囲気に全くそぐわない地味な低層の建物があった。そこに防衛庁が入っていたことを記憶している人は多いだろう。外苑東通りに面した入り口に、陸上自衛隊員が立ち番をしていたものだ。終戦時まで、その建物がどう使われていたのか、私は正確なこと

を知らないが、麻布聯隊の建物であったことは間違いない。

ミッドタウン・ビル群の外側を北から時計回りに回ってみた。東側はなだらかな斜面で、かなり広い公園のようになっており、小さな屋外アイススケートリンクもある。麻布聯隊はここをどのように使っていたのだろうか？ 当時のことを書いた掲示があるのではないかと思って探したが、見当たらなかった。歩き回って疲れたので、ミッドタウンのメインビルの入口の近くにある Starbucks の店外に置いてある椅子に腰かけて、コーヒーを飲んだ。日曜日の午前10時過ぎなので、人出はまだ多くはない。斜め向かいに The Ritz Carlton への入口が見える。このホテルには、一泊200万円の部屋があると聞いた。泊らなくてよいから、一見したいものだ。

ミッドタウンの北の端から外苑東通りを西向きに渡って、さらに300メートルほど行くと、国立新美術館がある。この美術館の建物は、波のようにならぬガラス窓壁から成る超モダンなものだ。その左手に、ぼつんと建っている小さな建物がある。これこそ、麻布3聯隊の兵舎の一部をわざわざ残したものだ。その由来を書いた掲示があった。それによると、この建物は1928年(昭和3年)8月に竣工したもので、歩兵第3聯隊の兵舎として使われた。アールデコ調のデザインで、当時としてはモダンなものだった。地上3階、地下1階、総床面積27,782平米、鉄筋コンクリート製。

終戦後、この建物は米軍に接收されていたが、1962年(昭和37年)から東大生産技術研究所がここに入り、2001年(平成13年)に駒場に移転するまで使った。この時期のことは、私は比較的よく知っており、何度か中に入ったことがある。この建物は、南側にあった玄関から見ると、「日」の字を90度回転して縦長にした形になっていた。中庭が2つあったわけだ。新美術館別館として保存されている部分は、正面玄関の西側にあった通用口付近だ。そこから入ると

中庭に出たが、ここは通り抜けることができた。学術会議の建物が近くにあり、私は日比谷線六本木駅から学術会議に行くとき、ここを通り抜けて行った。

新美術館の向かいに置かれたベンチに腰をおろして、75年前のことを想像した。2・26事件の日は大雪だった。この日の早朝、まだ暗いうちに、約1,400名の兵士たちは上官である青年将校の命令に従って、兵舎内の中庭に整列したであろう。カーキ色の軍服の上に外套を着こみ、軍帽をかぶり、完全武装だったはずだ。三八式歩兵銃を肩にして、隊列を組み、降り積もった雪を軍靴で踏みしめて出発した。外苑東通りに出て、六本木交差点で左折し、溜池に降りた。そこで分散して、本部となった赤坂の山王ホテル、霞が関の首相官邸、三宅坂の陸軍省、その他の要所占拠に向かった。別に要人襲撃に向かった隊もあった。

それから3日後の2月29日に、つわものどもの夢は潰えた。その間にあったさまざまな出来事は、今では詳細に研究されている。歴史家ではない松本清張が書いた「昭和史発掘」(文春文庫新装版全9巻)は最も詳細なものと言われている。それでも、また新しい資料が発見されたわけだ。この事件は日本の歴史のターニングポイントだった。それから75年が過ぎた。つわものどもの夢の跡には、夏草は生い茂ってはいない。超モダンな美術館や高層ビルが出現している。今から75年あとには、これらはどうなっているだろうか。(おわり)